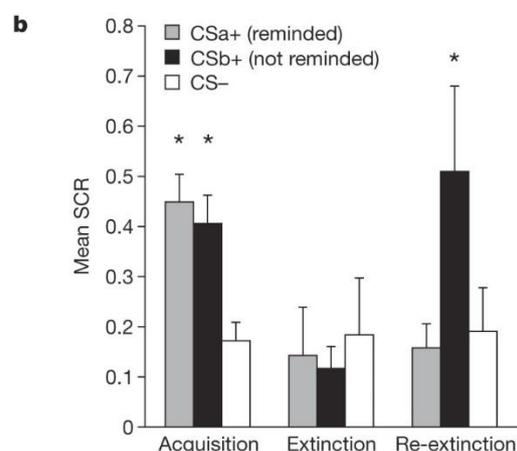
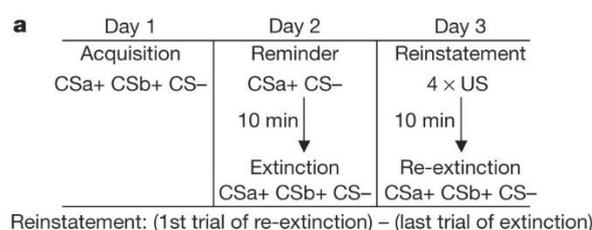
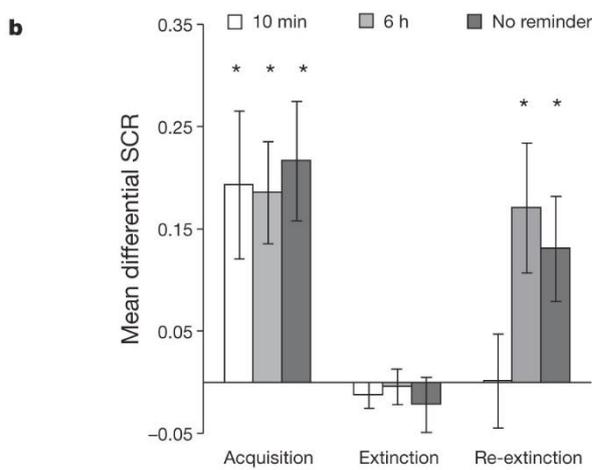
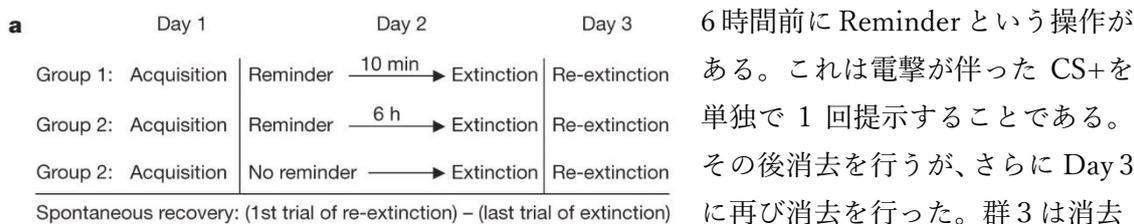


今回は Schiller et al. (2010) Nature, 463:49-53 のヒトを対象とした恐怖の記憶の実験を紹介する。上図が方法と結果である。3 群あり、Day 1 には視覚刺激と電撃の対提示で恐怖の条件づけが形成された。Day 2 には消去が行われるが、群 1 と 2 はそれぞれその 10 分、



上図 b が結果で 10 分の群は 3 日目の再消去で自発的回復がみられない。この効果は 1 年間持続した (図省略)。下図は Reminder を行う CSa+ と行わない CSb+ を設け、その 10 分後に消去を行った。Day 3 に US を 4 回単独提示する Reinstatement を行い、その後再消去した。その結果が下図 b で、Reminder を行わなかった CS+b では SCR 反応が増加し、Reinstatement の効果がみられた。

これらの結果は、Reminder 操作は恐怖の記憶を不安定にし、その不安定な状態で消去を行うと、恐怖の記憶が弱まることを示している。ただし、Reminder 後 6 時間でその効力は、すなわち、恐怖の記憶の不安定な期間は終了していた。この時間窓は『期待 51』の発端と整合的である。小嶋・今井 (1971) の最初のテストは Reminder と類似の効果を持ったのだろうか。Day 1 の獲得後に、いろいろな時間の後に、Reminder を含め記憶を不安定にする操作を行うのは意味のあることだろうか。